様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　5 月 7 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１５７
研究課題名（和文）　英作文敷居レベルの実証検証とその教育的応用

研究課題名（英文）　Threshold to Transfer Writing Skills from L1 to L2

研究代表者
伊藤　文彦（ITO FUMIHIKO）
群馬工業高等専門学校・一般教科（人文科学）・准教授
研究者番号：５０４１３７４５

研究成果の概要：日本人英語学習者の「国語作文力と英語作文力」、「英語力と英語作文力」との間には、それぞれ統計的に有意な相関関係があることが確認された。また、英語力が低い学生群の「国語作文力と英語作文力の相関係数」は低いが、英語力の高い学生群の「国語作文力と英語作文力の相関係数」は高いということも、確認された。この調査結果は、国語作文力が英語作文力の大きな影響要因となるためには、ある一定レベル(敷居レベル=閾値=threshold level)以上の英語力が必要であるということを示唆している。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,300,000	0	2,300,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	150,000	3,450,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育・英作文・相関・敷居レベル・閾値・writing・correlation・threshold

１．研究開始当初の背景

第一言語の作文能力を第二言語の作文活動で発揮するためには、敷居レベル【Threshold Level】以上の第二言語能力が必要であるという仮説（第二言語作文敷居説）がある。第二言語作文敷居レベルとは、そのレベル以下の第二言語能力であれば、第一言語作文能力が第二言語作文能力の影響要因にはならないが、そのレベル以上であれば、第一言語作文能力が第二言語作文能力の影響要因になるという第二言語能力の境界線である。

研究開始当初、作文敷居レベルの研究は国際的にも日が浅く、海外研究から得られる知見も定まっていなかった。そして日本の英語教育界では、日本語作文能力を視野に入れた英語作文能力向上のための学習理論研究も進んでいなかった。つまり、どのような英語作文授業を展開すれば、質の高い英語作文活動が可能となるのかという難問への解答が見出されていない状態で、英作文敷居レベルの研究は、英語作文学習ストラテジーを確立する上で、成果が待たれている課題であった。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、英作文敷居レベルの存在を実証的に検証し、英作文敷居レベルとはどの程度の英語力なのか、客観的な英語力テストを用いて調査することである。

本研究の第二の目的は、国語作文力と英語作文力の相関関係を調査することである。

３．研究の方法

(1) データ収集

317名の日本人英語学習者(大学1～4年生)に対し、TOEIC(Test of English as an International Communication)を実施した後、国語作文テストと英語作文テストを行った。母語や英語からの影響を中和するために、総被験者の半数が最初に英語で作文を書き、一週間後に日本語で書いた〈英語→日本語の順〉。そして残りの半数は、日本語で作文を書いた一週間後、次に英語で書いた〈日本語→英語の順〉。

(2) データの分析

第一に、被験者の計量的国語作文力を理解するために、国語作文の字数・文数・一文あたりの字数を集計した。同様に、英語作文の単語数・文数・一文あたりの単語数を集計した。これらの計量的データに留意した理由は、英語作文熟達度要因に関わる量的データを視野に入れて、できる限り多面的な分析を行うためであった。

次に本研究で得られた主要データであるTOEIC･国語作文力･英語作文力を得点化した。TOEICは国際ビジネスコミュニケーション協会に委託、国語作文テストは井上泰至准教授(防衛大学校、国文学専門)、副田賢二准教授(防衛大学校、国文学専門)の二氏に採点を依頼した。また、英語作文テストは大井恭子教授(千葉大学)と研究代表者が評点を行った。

本研究で得られたすべてのデータを集計後、相関分析・単回帰分析・重回帰分析を行い、第二言語作文敷居説を検証した。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

①英作文敷居レベルの検証

英作文敷居レベルが存在するのであれば、「日本語-英語作文能力の相関係数」と英語力の関係は、図１のようになると推測された(英語力レベル 3 が英作文敷居レベルで、被験者の英語力レベルの向上とともに「日本語-英語作文能力の相関係数」も上昇する)。

本研究で入手した国語・英語論文を TOEIC 成績別(第Ⅰ群[N=34]　250～295 点、第 II 群[N=43]　300～345 点、第 III 群[N=81]　350～395 点、第 IV 群[N=51]　400～445 点、第 V 群[N=42]　450～495 点、第 IV 群[N=27]　500～545 点)に分類し、国語・英語論文得点の相関係数を算出し、図表化した(表 1[Six Levels of Correlations between L1 and L2 Writing Scores]、図 2[Six correlations at different

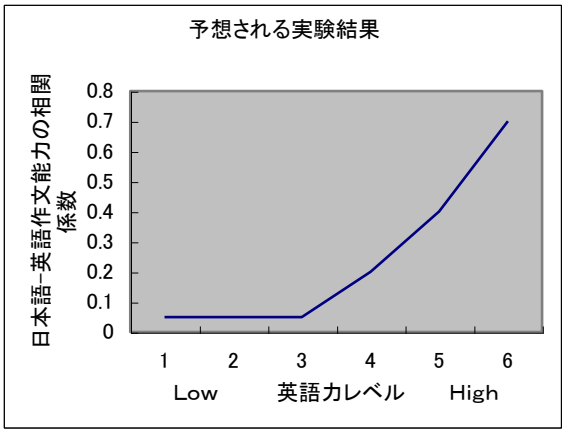

図 1　仮説上の実験結果

表 1

Six Levels of Correlations between L1 and L2 Writing Scores (N = 278)

	I (34)	II (43)	III (81)	IV (51)	V (42)	VI (27)
L	250 -295	300 -345	350 -395	400 -445	450 -495	500 -545
C	.125	.330*	.295**	.564**	.512**	.497**
S	.481	.031	.007	.000	.001	.008

*p < .05. **p < .01.

Note. L = L2 Proficiency Levels. C = Correlations. S = Sig.

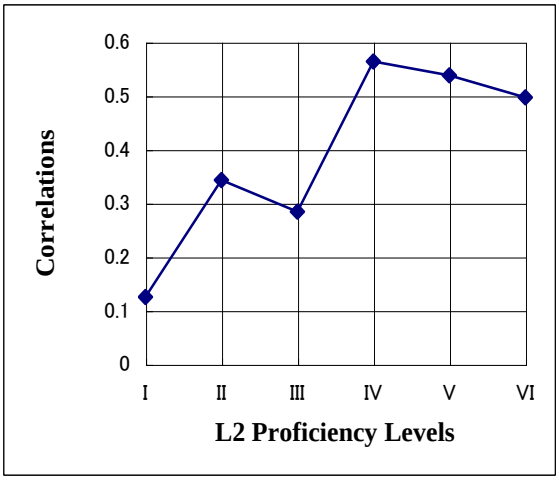

図 2　Six correlations at different proficiency levels

proficiency levels]参照)。

表１及び図２が示すように、英語力が低い学生群の「国語作文力と英語作文力の相関係数」は低いが、英語力の高い学生群の「国語作文力と英語作文力の相関係数」は高い傾向にあることが確認された。この調査結果は、国語作文力が英語作文力の大きな影響要因となるためには、ある一定レベル(敷居レベル=閾値=threshold level)以上の英語力が必要であるということを示唆していると解釈できる。

②国語作文力と英語作文力の相関関係

総被験者317名分の国語作文力と英語作文力の相関係数は、0.474(信頼区間 0.384～0.555)であった。日英二言語作文力の相関は弱いながらも関連があると判断できる数値である。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

Sasaki and Hirose (1996)<Explanatory Variables for EFL Students' Expository Writing. *Language Learning*. Vol. 46. 137-174.> や Kamimura (1996)<Composing in Japanese as a First Language and English as a Foreign Language: A Study of Narrative Writing. *RELC Journal*. Vol. 27. 47-69.>が、英作文敷居レベルの存在を示唆するデータを報告して以来、十数年が経過している。しかしながら、英作文敷居レベルの調査のために、英語力が様々な段階にある被験者を用いた追試の報告は、本研究代表者の論文(Ito (2004)<The Interrelationship among First Language Writing Skills, Second Language Writing Skills, and Second Language Proficiency of EFL University Students. *JACET Bulletin*. Vol. 39.>)、Ito (2009)<Threshold to Transfer Writing Skills from L1 to L2. KATE Bulletin Vol. 23.>を除き、ほとんどない。理由は研究難度が高いからと推測できるが、その主な原因は、調査過程上での統制条件や制約が多いことである。(例えば、理由 1―様々な段階にある被験者を用いる必要性から、最低 300～360 人程度の被験者が必要となる。【1 グループあたり 50～60 人×6 段階に分かれた英語能力グループ】。理由 2―国語作文・英語作文の評価は、それぞれ２名の採点者が評価し、その平均点を用いる。採点者はそれぞれ国語作文・英語作文の専門家でなければならない。)

したがって本研究課題は、英語作文能力習得に関する独創的な研究であるばかりでなく、研究難度が高い実験といえる。英作文敷居レベルは、日本人が日本語で理解している背景知識や教養を英語に転用することが可能となる最低限の英語レベルである。このレベルの解明は、英作文学習活動時における英語力の指標作成に寄与するばかりでなく、効果的な学習方法・教育プログラム・カリキュラムの作成にも役立ち、英語教育に資する点が多く見出されるはずである。

さらに本研究は、第一言語作文力と第二言語作文力の関係を調査している国内外の一連の研究、特に英語を第二言語とする二言語作文力の相関分析(e.g., Cook (1988)<The validity of the contrastive rhetoric hypothesis as it relates to Spanish-speaking advanced ESL students.> (Doctoral dissertation, Stanford University, 1988). *Dissertation Abstracts International, 49*(9), 2567A. 、Carson, Carrell, Silberstein, Kroll, and Kuehn (1990)<Reading-writing relationships in first and second language. *TESOL Quarterly, 24,* 245-266. > 、Abu-Akel (1997)<On reading-writing relationships in first and foreign languages. *JALT Journal, 19,* 198-216.>)の研究蓄積の一つとなる。

参考

Cook―母語(スペイン語)、第二言語(英語)

Carson et al.―母語(中国語)、第二言語(英語)

Abu-Akel―母語(アラビア語・ヘブライ語)、第二言語(英語)

(3)今後の展望

英語作文力の転移は、英語力の優れた学生において可能であるということを、本研究で得られたデータは示唆している。しかし、国語作文力を英語作文活動で発揮するためには、敷居レベル以上の英語力が必要であるという仮説(英語作文敷居説)検証は、現在発展途上段階にある状況なので、本研究結果を一般化するためには、実験条件を更に厳しく統制した追試を行い、得られたデータを比較する必要がある。

また、本研究において取り扱うことができなかった英語作文熟達度要因 (例えば、T-unit、TTR [Type Token Ratio]、単文・複文・重文・重複文・断片文等) をも視野に入れて、英作文敷居レベルを検証しその教育的応用を再度考察すると、更に英語教育に貢献できる研究結果が得られるはずである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計１件)

① Fumihiko Ito、Threshold to Transfer Writing Skills from L1 to L2、KATE Bulletin (関東甲信越英語教育学会紀要)、査読有、23巻、(2008)、pp.1-10

〔学会発表〕(計 2 件)
①Fumihiko Ito、The Relationship between L1 and L2 Writing skills、 JALT (全国語学教育学会)、2008 年 11 月 3 日

②Fumihiko Ito 、Threshold to Transfer Writing Skills from L1 to L2, Symposium on Second Language Writing 2007、2007 年 9 月 15 日

〔図書〕(計 2 件)
① 杉田米行・伊藤文彦・杉野俊子、大阪大学出版会、トータル・イングリッシュ、(2009)、pp. 120-163

② 杉野俊子・伊藤文彦、ナツメ社、英語論文の書式と使える表現集、(2008)、pp. 49-64、pp. 66-239